

反障害通信

21. 8. 18

110 号

コロナ感染症対策の論点整理⑨

コロナワクチン批判のデマ扱い

ニュースにおける「ワクチンのデマ」報道

まず、前号 109 号の「インターネットへの投稿から」で取り上げたことから「編集後記」で更にコメントしたことを、「編集後記」は記録的に残りづらいので、この巻頭言で再録します。

「インターネットへの投稿から」は、二つともコロナワクチンに関する事。「2021.6.30 マスコミのワクチンに関する「デマ狩り」について」を出した日に、テレビ朝日の「報道ステーション」で、ワクチン接種後の死者が 277 人になっているという話を出していました。で、その後に、コメンテーターの医者が「ワクチン接種のメリットとデメリットで、メリットが大きいので接種を勧めます」というような話をしていました。よく分からないのです。死んだひとには、メリットなどないのです。7月4日の朝日新聞のGlobeのBooksで浅井晶子さんという翻訳家がドイツで出された本の紹介で「コロナワクチンは救いか」という文を寄せています。()内の斜文字はわたしの補追コメントです。「……………」は、中略です。

『『コロナワクチン——救いかリスクか?』で著者はワクチンの治験期間が極度に短いと強調する。新しいワクチンの実用化には通常 10 年前後かかるが、コロナではどの社も普通なら順次実施する治験の各段階を同時に進めて大幅な時間短縮を図った。こうして EU では開発開始から 1 年弱で市民への接種が始まったが、実はどのワクチンもまだ治験中であり、「緊急承認」を受けているに過ぎない。／当然ながら長期的に人体に及ぼす影響は、未知のままだ。実際に別の遺伝子ワクチンでは 1 年半後に重篤な副反応が確認され、治験が打ち切られた例もある……………コロナワクチンを一概に否定はしないものの、本書に上記のような負の情報が多いのは、各国の政府とメディアがワクチンを唯一の解決策として強く推奨する一方で、多くの専門家の警告がほとんど取り上げられないことへの危機感からだ……………EU では大規模接種も進み、血栓症（これは日本ではまだ余り使用されていないアストラゼネカ製のワクチンです）などの重篤な副反応例、死亡例の報告(日本での最近の報告、「因果関係がはっきりしない」とされつつも 277 名)も上がっている。ドイツでは接種済みの人を対象に徐々に規制が緩和される一方、12~17 歳の子供一般の接種は常設予防接種委員会の反対で見合わせとなりそうだ。接種に積極的な人も多いが、本書が刊行後 4 ヶ月以上売れ続ける事実は、政府とは違う見方や主張も知っておきたいと考える市民が多数いることを示している。」

ワクチンのことで検索していたら、[新型コロナワクチンの副反応疑い報告について | 厚](#)

[厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](http://mhlw.go.jp)が出てきます (以下、7月21日付けのホームページに基づく文書です。どんどん更新されていて、過去の文書にも変更が及んでいるようです)。読んでみると、かつて言われていた「日本の官僚の優秀さ」と言われていたことから隔絶した非論理的文が目につきます。例えば、「知見は得られていません」とか、いう非論理的文でのごまかしです。これは裏を返せば、「可能性は排除できない」ということです。忖度政治のなかで、ごまかしの論法がまかり通り、それが透けて見えるのです。論理的な思考をするひとたちは、逃げ出していったのでしょうか？

ここで前号の「編集後記」再録を終わります。

厚生労働省のホームページの「デマ指摘」への疑問

さて、前項の引用文中に貼りつけているのですが、厚生労働省のHP最新版7月27日現在 (更新されているので、下のURLをクリックすると新しいものが出てくるかもしれません)。[新型コロナワクチンの副反応疑い報告について | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](#)

このホームページは刻々と変化しているのですが、「デマの指摘」のようなコトを取り上げてみます。黒線囲みになっているところの引用です。

【ご注意ください】

- ・国内外で、注意深く調査が行われていますが、ワクチン接種が原因で、何らかの病気による死亡者が増えるという知見は得られていません。
- ・海外の調査によれば、接種を受けた方に、流産は増えていません。
- ・接種後の死亡と、接種を原因とする死亡は全く意味が異なります。接種後の死亡にはワクチンとは無関係に発生するものを含むにもかかわらず、誤って、接種を原因とする死亡として、SNSやビラなどに記載されている例があります。
- ・厚生労働省では、医師から副反応を疑って報告された事例を、透明性をもって全て公開しています。詳しくはこのページをご覧ください。

(引用終わり)

で、その中から以下の文が出ています (文字のポイントや行間は一部変えてあります)。途中までの引用です。「接種後の死者」について留意しての引用です。その他のことを見たいひとはホームページを見てください。

報告された事例と評価について

副反応疑い報告について、報告された症例や、評価の結果等について、ご紹介しています。

新型コロナワクチンの副反応疑い報告の報告状況については、専門家による評価結果とあわせて、速やかに皆さまに情報提供できるよう、審議会(※)を通常より頻繁に開催し、審議会の度に公表することとしています。

(※)厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会、薬事・食品衛生審議会薬事分科会医薬品等安全対策部会安全対策調査会（合同開催）

▷令和3年7月21日開催（資料は[こちら](#)） **NEW**

接種開始（令和3年2月17日）から7月11日までの症例で、ファイザー社ワクチン、武田／モデルナ社ワクチンについて副反応疑い報告がなされ、それぞれの頻度は0.03%（58,439,259回接種中17,887例）、0.02%（1,818,033回接種中404例）でした。いずれのワクチンも、これまでの報告によって引き続き安全性において重大な懸念は認められないと評価されました。なお、ワクチンにより接種対象者の年齢や接種会場などの属性が大きく異なるため、両ワクチンの単純な比較は困難であり、注意が必要とされました。

死亡例の報告について（資料[1-3-1](#)、[1-3-2](#)、[1-5-1](#)）

- 対象期間（7月11日まで）に、ファイザー社ワクチンについて663例、武田／モデルナ社ワクチンについて4例の報告がありました。その7月16日までには、さらに両ワクチンを合わせて84件の報告がありました。
- 現時点では、ワクチンとの因果関係があると結論づけることのできた事例は認められず、ワクチン接種と疾患による死亡との因果関係が現時点で統計的に認められた疾患はありませんが、引き続き、個々の事例について専門家による評価を行うとともに、接種対象者の属性に留意しつつ、集積する事例に関する情報を収集し、評価を行っていくこととされました。
- 死亡例の報告に関しては、現時点において引き続きワクチンの接種体制に影響を与える重大な懸念は認められないとされました。

（引用終わり）

さて、資料1-3-1で、接種後死亡例の分析の表が出てきます。α・β・γと分類しています。それによると、（註がついていますが、わたしの指摘する論点に影響はないと思われるので、省きます）これは表になっているのですが、うまくコピーできないので、内容を列記します。

- α（ワクチンと死亡との因果関係が否定できないもの） 0件
- β（ワクチンと死亡との因果関係が認められないもの） 3件
- γ（情報不足等によりワクチンと死亡との因果関係が評価できないもの） 660件

となっています。

これと、【**ご注意ください**】を比較します。「・国内外で、注意深く調査が行われていますが、ワクチン接種が原因で、何らかの病気による死亡者が増えるという知見は得られていません。」とありますが、これと、「 α （ワクチンと死亡との因果関係が否定できないもの）0件」「 γ （情報不足等によりワクチンと死亡との因果関係が評価できないもの）660件」は矛盾すると考えないのでしょうか？ $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ による区分けによると、【**ご注意ください**】の「・国内外で、注意深く調査が行われていますが、ワクチン接種が原因で、何らかの病気による死亡者が増えるという知見は得られていません。」は「ワクチン接種後の死者が出ていることには、ワクチンと死亡との因果関係は否定できないもので（ β の3件は否定できますが）、因果関係についてはまだ評価中です。」となるはずで

この【**ご注意ください**】の「知見は得られていません」という語法、わたしは科学知から政治的意図をもって誤魔化すときの常套句ではないかと、押さえています。後で、その中身をきちんと追っていけばその中身は分かるのですが、これだけ見て、「因果関係はない」という「知見」を広める逆の「デマ」の元になりかねません。

さて、【**ご注意ください**】の後の二つについて、二番目の「・海外の調査によれば、接種を受けた方に、流産は増えていません。」については、そもそもまだ接種が始まり一年もたっていません。増えるも何も検証しようがないと思いますし、遺伝子操作作物を食べた動物や遺伝子操作動物での流産の事例は出ています。今回の「読書メモ」の「たわしの読書メモ・ブログ 562・天笠啓祐『新型コロナワクチン—その実像と問題点』緑風出版2021」と「インターネットへの投稿」の「2021.7.27 TBSBS「報道1930」への投稿「ワクチンデマ」について」を参照ください。

もう一つ、書いておきますが、「デマ」批判については、「デマ」と指摘するひとたちが上げている「遺伝子変異」や「不妊」の話があるのですが、これらは、そもそもモニタリングで出てくるのは、相当後になるので、現時点で「デマ」と指摘しようがないはずで

だから、ここで出せなかったのとも推測されます。そもそも、この二つのことで、「安全性が確保されている」といったら、それ自体がデマです。

そこでもう一つの「・接種後の死亡と、接種を原因とする死亡は全く意味が異なります。接種後の死亡にはワクチンとは無関係に発生するものを含むにもかかわらず、誤って、接種を原因とする死亡として、SNSやビラなどに記載されている例があります。」ですが、一応論理を問題にするひとの間では、「接種後の死亡と、接種を原因とする死亡」は区別しています。問題は、政府とマスコミとかが、「接種後の死亡」の情報をきちんと流さないで、きちんとした議論もしないまま、「みんなで接種しましょう」というキャンペーンのようなことをやっていることです。

ワクチンの副反応として考えられること

ワクチンの副反応として筋肉痛、発熱、倦怠感などがほぼ認定されていますが、接種後の死亡も副反応かどうかははっきり検証する必要があります。そもそも、それらのことは、早発性の副反応です。中期的なこととしてまだ出てくる可能性もありますし、それに晩発性の癌などの発症も考えると、すでに出ている副反応は氷山の一角にすぎないことである可能性があります。

もっと言うと、そもそも遺伝子操作技術を使うことが、一体これから何を引き起こしていくのかを考えると、これを契機に一気に遺伝子操作技術が推進されていく、今回「葉の

副作用」という概念から新しく展開して「副反応」という言葉を使い始めた意味を考えると、それもまさに副反応と言えるのではと思うのです。

因果論的思考は理論的なところで使えるのでしょうか？

さて、厚生労働省の文書の中で、「因果論」という言葉が出て来ます。因果論というのは物理学で言うと近代知のニュートン力学的なところで使われていた知で、量子力学的なところでの転換が起きていて、それは哲学・論理的なところでのパラダイム転換にも通じていて、過去の遺物となっていると、哲学的なところを少しは学習したわたしは押さえています。

長くなるので、後日に期しますが、簡単に言うと、函数的なことで、変数をひとつにして分析するようなことで、いくつもの変数から成り立っている函数的連関のなかでは使えないのです。まだ「因果論」ということばを使っている事態から見直していく必要があるのではと思っています。

批判に答えて、ちゃんと対話の中から、検証を？——「デマ」の指摘がデマになる可能性——

前述の接種後の死亡例について、「評価中」ということですが、ワクチンを一応打ち終わってから、「評価」の結論を出してくる、そもそも出す気があるのか、という憶測さえ起きってきます。大きな薬害になったらどうするのでしょうか？

更に、8月4日付けのホームページ更新で、「評価中」が些細な個別評価のところから「評価不能」になっています。推測すると「評価中」とすると、「評価を下すまで、ワクチン接種を中止すべき」という意見が当然出てくるので、「評価不能」としたのでしょうか？ ですが、「評価不能」としたものを打ち続ける恐ろしさを感じるのはわたしだけでしょか？

そもそも、この「評価中」ということを「評価不能」ということを変えたのは、過去に出した文書を改竄したことです。この間、政府が情報の隠蔽・改竄をやってきて、そんな中で、このワクチン問題でも同じことになっているのではと思えるのです。きちんとした、情報公開と情報提供がきちんとなされないことが、「デマ」や「風評被害」の元になっているということが、なぜ、分からないのでしょうか？

ワクチン接種が始まって、それにのめり込んでいるのですが、ワクチンの安全性の立証は、モニタリングが終わらないと一応の立証もできません。ひょっとしたら、途中で使用中止になるかもしれません。安全性の立証など、今回のクルーのワクチン接種している間にできそうにありません。そもそも、情報をきちんと押さえるということ自体が必要なのです。

菅首相はワクチン接種を「唯一の手段」とまで言ったりしています。そもそも、ほとんど副反応がないPCR検査の多角的拡充なども、なぜ、やらないのでしょうか？

このコロナウイルス感染症対策が、これからの社会のあり方の試金石のようなことになっているのではないかとも思えるのです。

(み)

(「反差別原論」への断章) (37) としても)

読書メモ

今回は、これまでの学習で今ひとつ押さえきれなかった民族問題に関する追加学習本2冊と、一連の学習に一段落がついて、これまでいろいろ書いてきたコロナウイルス関係の学習で映像だけでなく本からも吸収しておきたいと急遽挟んだコロナウイルスワクチンの本2冊です。たまたまなのですが、民族問題では、民族虚構論と民族実体論、コロナウイルスワクチンでは、バイオテクノロジー関係で長年論攷を積み重ねてきた天竺さんの論攷とどうも論理的におかしく陰謀論的になっている本、わたしにとって共鳴できる天竺さんの本と、それとは真逆な疑問に感じたことが多々あった本と対立図式になってしまいました。勿論、疑問に感じる本も、逆に論攷を深めるにはいろいろ吸収することが多かったのですが。

たわしの読書メモ・・ブログ 560

・小坂井 敏晶『増補 民族という虚構』筑摩書房(ちくま学芸文庫) 2011

この本は、二〇〇二年に出された本の文庫増補版です。そもそも、二〇〇二年に出された本自体が、最初フランス語で出された核になる文に、書き下ろしの原稿を加えてできたものです。著者はフランスの大学を出て、そこで教員もしているとのこと、まさに国際的な観点をもった民族問題のとらえ返しになっています。

この本は、確か本屋の店頭で本のタイトルに惹かれて買った本です。実は本の管理ができていないで、「二〇〇二年に出された本」も買っていて、ここで取りあげてる二〇一一年文庫版が増補版なので、こちらで読みました。「虚構」という概念は、わたしがいろんな分析に援用してきた廣松物象化論と、それから吉本隆明共同幻想論と通底する概念として、期待していました。で、この著者は社会心理学的なところからのアプローチなのですが、哲学、社会学、生物学、さらには仏教との対話もあり、民族や集団性というところにおいて、分析していくいろんなタームに、共通するところもあり、ぞくぞくする思いで、読み進めていました。脱構築論的な観点が出てくるのですが、著者がそれを否定的に批判しているようです。確かに、反本質主義的なところは採り入れているし、ルソーの思想が結局全体主義的になっているとか、ダーウィンの進化論への言及とかも出てきます(ただ、著者は個ということの実体化に結局陥っているようで、ダーウィン進化論の自然淘汰説にとらわれています)。ただし、繰り返し実体主義批判を展開しようとしています。廣松物象化論の核心としてある実体主義批判と通底しています。モノからコトへという観点もあるようです(87P)。哲学やいろんな学を押さえたところの論攷で、共鳴し備忘録として残して置きたいことも多々あるのですが、また膨大な分量になるので、特に留意するところと、著者の論攷への違和や論的深化というところでの対話メモに留めます。関心のある方は是非この本に直接あたってください。

実は、最初からちょっと違和を感じていました。わたしは、最近の本を読むとき、「まえがき」、「あとがき」を読み、それから解説があれば解説も読んでから本文を読み始めるようにしています。そこで、「あとがき」のマルクスの「フェイルバッハに関するテーゼ 11」の「哲学者たちは世界をいろいろ解釈してきたにすぎない。大切なのは世界を変革することだ」を引用して、「そのような意図は初めから私になかった。」334Pとあります。で、軽く、

アカデミックに徹して理論的に詰めていくという主旨だろうと押さえて読み始めたのですが、これがそもそも、結論的なところで、大きくわたしサイドとは隔たって行くことになります。これについては、後述します。

ベテという民族を例に挙げて論攷を進め「同一性が初めにあるのではない。逆に、対立する差異が同一性という現象を生み出すのである」36P 同一性があり、差異が浮かび上がるといふところを批判して、異化——差異化が先にあり、そこから同一性概念が形成され、それによって、更に差異化が差別化につながっていくという「差別の構造」を問題にしています。「差異があるから差別が起きてくる」という広く広まっている差異論——差別論を反転させているのです。ですが、反差別ということを明確に出していません。運動的に展開していかないということから来ているのかもしれませんが、それだと、逆に、論を深化させ得なくなります

もうひとつ、注目していたことは、「間主観性」概念が出てきていることです。このあたりは、廣松さんも展開していたことなのですが、ただ「間主観性」概念というのは、個と個の関係としてのとらえ返しなのですが、それは、「今、ここで」といふところのとらえ返しになっていきます。民族問題を差別の問題としてとらえ返していくとき、問題になるのは、むしろ共同主観性の問題だとわたしは押さえます。すなわち、共同主観性による抑圧の構造なのです。間主観性という1対1の関係では、抑圧の構造ということが明らかになりません。共同主観性を問題にして抑圧の構造が明らかになっていくのです。「虚構の共時的通時的共同主観性」といふところからのとらえ返しの問題です。

そしてさらにいうと、それは単に意識の問題だけではないのです。著者は、ちゃんとマルクスをくぐっていないようなのです。マルクスの唯物史観の観点がありません。だから、意識が形成される土台といふとらえ返しがないので、土台から変えていくという社会変革の志向が出てきません。「あとがき」の「フェイルバッハに関するテーゼ」への著者のコメントにもあきらかなように、この観点が無いのです。著者の論攷は社会心理学ところに棹さしているのですが、もう一つ、マルクスの唯物史観の観点からとらえ返した論攷を求めるとは、いつものわたしのないものねだりになってしまうのですが。

フェイルバッハに関するテーゼの著者の拒絶は、結局民族問題を差別の問題としてとらえて、それを解決していこうという指向性を欠落させているが故に、「その背景には、論理以前の世界観が横たわる。価値判断は合理的行為ではない。信仰だ。」328P として、虚構にも意味があるようになり、「神の死によって成立した近代でも、社会秩序を根拠づける<外部>は生み出され続ける。根拠と呼ばれる虚構が失われる世界に、人間は生きられない。」328P 神という虚構そのものを秩序といふところから認めていく処まで進んでいます。

そこにあるのは実体主義批判をしつつ、結局民族を実体化してくことになってしまっていると言わざるを得ません。

差別があるから民族を問題にするのであって、差別といふことの反作用としての民族の集産性が出てくるのですが、その差別がどこから出てくるのかという観点、唯物史観的観点がこの本の中では出てきません。だから、反差別的展開にもならないし、反対にフェイルバッハに関するテーゼの否定に陥っています。差別がなくなっても、今日の民族的なことと残ることはあるのかもしれませんが、そうとしても、文化や言語の多様性といふこと

で認めあう関係が作っていかれるとも思っています。

さて、この本の中で出されている、いくつかの注目すべき論点を取りあげておきます。

著者はアメリカを多民族多文化社会として、フランスを普遍主義としてとらえ、対比させています。その上で、フランスが多民族多文化的になっているというような話も出て来ます。「多民族・多文化主義を標榜するアメリカ合衆国では、家族構造・宗教・食習慣・食習慣をはじめとして均一化が著しいのに、出身民族の固有性を認めないフランスの方に、却って文化的多様性が残っているという逆説をエマニュエル・トッドが指摘している。」293P このあたりは、むしろ差別形態論的な押さえ直しが必要だと思っています(註)。フランスの「普遍主義」と著者が書いているところは、同化主義的政策をさしているのだととらえられます。同化や融和も差別です。多民族多文化社会というのは、排他的なことが働く、併存ということでの融和的なことですが、そもそも民族間の経済政治的格差をなくさないで、そもそも社会の格差——差別を解体していかないと融和は差別の一形態になっていきます。ここでも反差別という観点が必要だと思えます。

さて、もうひとつ、一般的に広まっているルソー論とは、違ったとらえ返しを著者はしています。ルソーは自然性ということに根ざした自由ということを突き出しているのですが、著者は「<一般意志>が当人自身の心の奥底から出てくるという前提からして、<一般意志>に背く市民に対して服従を強要をしても、そのことがまさに自らの真の欲望を意味する以上、市民の自由は侵害されないという、ヒトラーかスターリンの言説と紛うような「論理」が、かくて成立する。」203P としています。「自由」概念のとらえ返しに貴重な提起です。

さて、著者は生物学的なところからの切り込みもしています。そのひとつがダーウィン進化論のとらえ返しですが、ラマルク進化論を批判して、突然変異と自然淘汰というダーウィン進化論に賛同しているのですが、グールドや今西進化論との対話がありません。池田清彦さん経由での対話が出てきますし、今西さんの「棲み分け」概念が出ていますので、まったくないわけではないのですが、そもそもダーウィン進化論がマルクスらの同時代のひとや後代のひとに及ぼした影響ということが言われているのですが、そもそもダーウィン進化論自体が、資本主義的な個人主義(「個」ということの実体主義的とらわれと「個」の析出)と資本主義的競争原理から出ていることをとらえ返したところで、進化論自体のとらえ返しが必要になっているのだとも思っています。

誤解のないように書いておきますが、著者の民族虚構論の突き出しの意義に共鳴しているのですが、民族差別を虚構としてはとらえません。民族差別があるから民族概念も生き続けるのだと押さえています。

この本はいろんな事例を出してくれているし、そのことをひとつひとつ検証しながら、廣松物象化論の観点から、民族問題に関する新しいテキストを形成するための大切な素材にできるのではないかとも思ったりしています。

註

三村洋明『反障害原論——障害問題のパラダイム転換のために——』世界書院 2010「第八章 差別形態論」参照

(追記メモ)

「人種とは客観的な根拠を持つ自然集団ではなく、人工的に区分された統計的範疇にすぎない」18P・・・物象化論からとらえ返す

たわしの読書メモ・・・ブログ 561

・白井 朗『マルクス主義と民族理論—社会主義の挫折と再生』社会評論社 2009

この本は、誰かに勧められて買った本です。一連の学習の中で、民族問題を押さえておく必要があるとして、前の読書メモの本を読んで、この本も一連のまとめとして読もうとされていて、著者のプロフィールや本の構成をちょっと見てパスしようかとしていたのですが、予想していたよりも収穫がありました。

「マルクス・レーニン主義者は差別の問題を押さえてこなかった」という指摘がなされてきました。そのひとつとしての民族問題の押さえ損ないがあります。

この本でも、マルクス／エンゲルスへの批判があります。「歴史的民族・非歴史的民族論」批判ですが、この本の中では出てきませんが植民地支配を容認する「野蛮の文明化」という論理もありました。ですが、この本の中でも指摘されていますが、アイルランド問題でのマルクスの転回が起きたとされています。これはマルクスの「古代社会ノート」などの研究から、「資本論草稿」などと相俟って、「アジア的生産様式論」という突き出しをします。マルクスが単線的発達史観から脱したとされていることです。これはマルクス／エンゲルスの進歩史観や発達史観といわれることへの一定のとらえ返しの問題に繋がっていきます。著者は今日の文化人類学的なとらえ返しにも言及し、そのようなところからもマルクス／エンゲルスのとらえ返しをしています。ただし、エンゲルスはアイルランド問題においても、自分の連れ合いがアイルランド人で、アイルランドのひとをかくまったりしていたとのことですが、「歴史なき民族論」の流れからする、民族差別的なところから脱し得なかったようです。著者は、このあたりのことをきちんと押さえているのですが、ひとつだけ、アジア的生産様式論を、「俗流的なアジア的停滞論の学説」316P としかとらえていず、マルクスの単線的発達史観からの脱したところで、発達史観に揺らぎをもたらす契機となる可能性の問題を押さえていません。マルクスも完全には転回し得たとは言えないのかも知れませんが。

さて、この本の特筆すべきことのひとつは、レーニン主義批判に踏み込んでいることです。まずは、レーニンの民族理論です。スターリンの民族政策のひどさは多くのひとが共有化としているのですが、レーニンは民族自決権を突き出していたとして、民族差別をきちんと問題にしていたというとらえ方があるのです。この著者は、マルクス／エンゲルスの民族問題へのとらえ返しから、オーストリア・マルクス主義のオットー・バウアーの文化共同体論とカウツキー言語共同体論との論争からレーニン、スターリンの民族規定まで触れています。スターリンの民族規定①言語②地域③経済生活④文化という四つの共通性、しかも、それら一つもかけたら民族とは言えない165P という規定など、その論争の歴史を押さえています。かなり詳しく踏み込んでいるのですが、このあたりはいつものないものねだりなのですが、レーニンとローザ・ルクセンブルクとの間での「民族自決権」をめぐる論争は書かかれていません。ローザへの言及はコミンテルン形成に反対したということ

だけです。これは、ロシア革命だけでコミンテルンを形成すれば、ロシアの路線の各国への押しつけになるというところでの批判です。ちなみに、ローザの予期は「レーニン組織論は一党独裁を生み出す」ということもあり、ことごとく、その予期は現実化しています。わたしはレーニンの民族自決権とローザの民族自治論との違いは、国民国家ということへの否定性の強さ弱さの問題で、ローザは「国家は廃棄されること」ということがレーニンより強かったというところで、ローザもプロ独は維持しているのですが、プロ独ということでのイメージの違いもそこから出てきます。著者は、ここで主題にしている民族問題のみならず、レーニンの組織論、運動論まで踏み込んで批判を展開しています。このあたり、わたしのレーニンとの対話とかなり共鳴しています。これについては、最後の「(追記メモ)」で後述します。

さて、この著者は、この本をイスラームの評価から始め、民族規定に踏み込んでいっています。それで、民族規定を最初は、「民族は言語共同体である。そして言語の広がりを作るのは多くの場合、宗教である。」62P と宗教を背景にした言語共同体という突き出しをしています。後に、「民族理論の性格からして、一般的・普遍的に論じることはきわめて困難であり、どの抑圧民族がいかなる歴史・言語・宗教・文化を持つ民族をどの時代から抑圧しているのかという歴史的具体性をしっかりとおさえて論じるべきである。」182P と、個別民族、とりわけその歴史性からとらえ返していく必要ということに収束しています。そして、「民族の定義について言うならば、それは最大公約数的な意味でしか与えることはできない、……」136P という押さえをしています。結局スターリン規定の反転で、何かひとつでも、民族は成立するとなるのでしょうか。

この著者はかなりイスラームの文化に共鳴しつつ、その世界史的位置というところを押し返しています。その論攷は貴重ですが、そもそも宗教とは何かというところを押さえる必要があるのではと、わたしは疑問を抱きました。神とは自然の物神化以外のなにものでもないのですが、絶対神を立てることによって、差別の構造にすっかり絡め取られてしまいます。なぜ、マル・エンが「宗教はアヘン」としたのか、それのみならず、宗教のもつ差別の構造ということをとらえ返す必要があります。とりわけ、イスラームには性差別的な側面があります。著者は「米軍のレイプが頻発し妊娠・自殺が増え、釈放されたとしてもイスラームの習慣によって夫以外の男性との性交渉を家族の恥として「名誉の殺人」がおこなわれる場合が多く、二重三重の苦痛である。」32P ということを書いていますが、その性差別に対する批判を書いていません。この本は民族差別を軸にして書かれている本です。障害問題に関しては、差別的な文の引用に「ママ」というルビを振っていますが、性差別やフェミニズムに関する論攷を押さえているひとからすると見過ごせない「スターリン主義はレーニン主義の嫡出子と考えざるを得ないのである。」275P という記述も出てきます。宗教を反差別論総体からとらえ返していく作業も必要になっているのではと思います。

この本の中で、ムスリム運動の指導者スルタンガリエフのことをとくにとりあげて書いています。何度も何度も逮捕され、そしてトロツキー暗殺と同時期に一連の粛正の最後の仕上げとして処刑されている事実が、まさにスターリン主義のみならず、それを引き出し容認したレーニンの組織論を軸にしたレーニン主義の批判にまで踏み込んでいるのです。

この本の特徴として、スターリンを徹底的に批判していることがあります。スターリン

はクルジアという少数民族の「出身」なのです。で、民族問題では、スターリンが他の問題ではほとんどないのですが、この民族問題では、理論的にレーニンに影響を与えたということが他の本には出て来ます。それをレーニンが評価し、スターリンの民族規定が広まったという側面があります。ですが、むしろスターリンがレーニンより大ロシア人主義的に民族抑圧を進めています。そして、コミンテルンを通じた各国運動、東欧諸国への収奪・抑圧など、民族問題に繋がることでことごとくのスターリンの抑圧性が、この本で書かれています。スターリン批判は、その粛清だけでなく、その負の歴史をきちんと総括しなければならぬとつくづく思います。

さて、スターリンとレーニン批判は、ロシア革命の評価の問題にまで及びます。ロシア革命を2月革命から10月の都市から農村へと波及したというようにとらえ返しを批判して、むしろ農民革命と民族運動の地方での動きがあったからこそ、都市革命とリンクしていったのだと押さえています。そして、むしろその民族運動を1903年の党大会以来レーニンはユダヤ人の組織であるブントを徹底的に押さえ込もうとしていたことを批判し、そしてイスラームにはイスラーム共産主義という勢力もあったのに、レーニンはそれを却けています。ことごとく民族問題での方針で誤っていると著者は指摘しています。このあたり著者は宗教批判を展開していないのです。なぜ宗教的な観点から、民族運動批判が出てこないのか、内容がつかめません。とにかく、「民族問題と農民問題を外部化した」としているのですが、これは民族問題のみならず、差別の問題総体に言えることですが、この本の中では、他の差別の問題は出てこないし、政治利用主義という指摘はでてくるのですが、そもそもそれが起きてくるレーニンの差別の「階級支配の手段(道具)論」の批判が出てきません。そして「外部」という言い方をしてしまうと、封建遺制的なとらえ方に陥りかねません。著者は植民地問題を本源的蓄積論からとらえ返しをしていますから、それを発展的に展開していけば、今日、ローザの「継続的本源的蓄積論」というところでの新自由主義的グローバリゼーションの進行下での資本主義体制の維持における差別の必然性・必須性ということが位置づけられます。そういうわたしのローザからくるとらえ返しとリンクしていきます。「外部」ということは、むしろ周縁化という概念ともリンクしていくことになります。ところで、資本主義が周縁化したことは、実は差別ということでもとらえ返ししていくと、周縁でも何でもなくて、資本主義成立の基底としての差別の構造ということになるのだと言えます。それは、反差別論的に展開していくと未来への収奪としての環境破壊の問題も含まれます。

さて、民族問題での著者の理論は、個別民族の問題からとらえ返ししていくとなっているのですが、いくつか、著者の民族規定のおかしさをわたしが感じたことがあります。それは、「アメリカ民族」という言葉が出て来るところです。アメリカ合衆国は多民族・多文化国家だという規定がでてきます。それと矛盾してしまうのです。実際はドイツ系アメリカ人とかアジア系アメリカ人とかアフリカ系アメリカ人という言い方があるので、アメリカ人という規定は、「アメリカ合衆国の国籍をもつひと」で、何々系ということが民族や人種を指す言葉として用いられています。それらのことを考えていくと、民族規定の深化をもたらします。そもそもなぜ、民族規定が結局個別民族からとらえ返ししかないという結論に至るのかというと、前の読書メモからとらえ返しこと、すなわち民族は「虚構」という

ところからのとらえ返しが必要になるのです。これは、物象化概念や構成主義概念からのとらえ返しによる、民族概念のとらえ返しなのです。わたしには、差別問題で繰り返し出てくる思いがあります。わたしは障害問題を自らの当事者性として押さえ返す作業をしているのですが、日本の「障害者運動」の中で突き出されていた、「「障害者」とは、「障害者」差別を受ける者である」という規定があります。これは民族差別にも援用できます。これには同義反復規定であるという批判があるのですが、差別の反照規定での民族の析出という問題なのです。そこからは、民族は国家が消滅していくことと同じように、民族ということ解消していくこととなるはずですが、しかし、著者はむしろ、民族を実体主義的にとらえているのか、著者は「・・・・・・民族ということが民族が生きていくうえで必須不可欠のものであるにもかかわらず・・・・・・」13P ということまで書いています。そして、民族消滅論的にとらえることを批判しています。そのひとつが後に書く廣松さん批判です。廣松物象化論からすると、まさに実体主義に陥っていると指摘できることです。わたしには、「民族なしには生きえない」ということは分かりません。そもそも、違う民族の両親から生まれた子供はどうなるのでしょうか？ 差別があるから民族概念は生き続けるのだらうし、言語の多様性と個別地域・家族文化の多様性ということは、否定することではないのですが。著者は、むしろ日露戦争での「アジアの小国日本はユーラシア両大陸にまたがる巨大な帝国に勝利した」17P とかいう記述や、「「祖国を持たねばならない」という記述、さらに「日本人は、明治維新を達成した民族であることに誇りを抱くべきである。」326P など、著者自身がナショナリズムにとらわれています。

さて、もうひとつの問題があります。それは、著者の民族論でムスリム的なことへの共鳴を出していることです。わたしは無神論者ですし、反差別の立場から論を展開しているので、前述したように神の想定が差別の構造を生みだし・維持していく構造をとらえ、宗教には批判的なのですが、宗教は力によって押さえ込むことではないし、洗脳のようなことをすることへも反対します。民族運動も同じです。民族運動は反差別運動として大きな意味がありますが、排外主義的なことを止揚したインターナショナルな展開を必要とするのではないのでしょうか？

さて、思いがけない著者との接点もありました。それは、わたしが思想的に多大な影響を受けた廣松渉さんと著者は伝習館で同期のひと、ビラ撒きをして一緒に退学処分になっています。ですが、著者は、廣松さんを批判しています。廣松さんも、他のマルクス・レーニン主義者と同じように差別の問題をちゃんと対象化出来ていないということには同じ思いを共有化します(註)。ただ、著者には、廣松理論へのとらえ返しがありません。廣松さんの物象化論からすると、著者の民族の実体化は批判されることです。実際、著者は廣松さんの最晩年の、朝日新聞に投稿した論文「東北アジアが歴史の主役—欧米中心の世界観は崩壊—日中を軸に「東亜」の新体制を」への批判を書いています。この論文、今日的にとらえ返すと中国の世界資本主義システムのなかでの資本主義経済的位置の上昇ということへの先見の明があったと言えませんが、その論攷には反差別という観点が欠落しています。著者は、前述したようにナショナリズムの陥穽に嵌まったという面もあるのですが、その論攷を見ていると汎アジア主義という内容も見受けられます。「東北アジアの・・・・」で廣松批判をしている著者自身が、汎アジア主義的なことに陥っているのでは

ないでしょうか？

実は、この著者は革命的共産主義者同盟の結成以来のメンバーで、中核派として長年活動していたひと、90年代初期に路線の違いの中で離脱したようです。まさに、日本共産党も含め、革共同両派もマルクス・レーニン主義の総括が出来ていないのですが、この著者はレーニン主義批判に転じています。これについても最後の「(追記メモ)」で、簡単に押さえます。

この論攷は、新左翼運動の総括に一石を投じているのではと思えます。このあたりは、わたし自身の新左翼運動の総括というところから対話の中に織り込んでいく作業に織り込みたいと思います。

(追記メモ)

・エンゲルスの手紙での各国の主体性を尊重するということがあり、スターリンとの違い 219P・・・レーニンは民族自決権を主張していたので、マル・エンと立場を同じくするようになるのですが、レーニンの自決権は結局虚構でしかないので、結局スターリンと同じになってしまいます。

・著者のロシア革命の負の側面の指摘 223-4P のわたしの要約①ムスリム諸民族の自治の否定②農業・農民問題の「外部」化③クロンシュタットの反乱の鎮圧④分派の禁止がスターリンの独裁体制を生み出した

・レーニンが継承した「歴史なき民族論」的な流れは進歩史観とリンク 226-7P・・・著者の「すぐれたイスラム文化」論も進歩史観へのとらわれ

・ヘーゲル歴史哲学の「歴史的民族論」——西欧中心史観 230P・・・初期マルクスとエンゲルスにリンク

・自己解放の否定 243P——外部注入論

・レーニンの自然発生性論批判の実践的否定が 1905 年ソヴィエト革命 248P・・・歴史なき民族論や発達史観的などころから「外部注入論」が生み出される

・著者の『共産党宣言』での革命の主体——プロレタリアート規定批判、『資本論』での農業と工業の同一視批判 256P・・・前者は民族解放闘争や農民運動の位置づけの問題での批判、今日的には、マルチチュードやサヴァルタン概念。後者は、著者は小農の位置づけの問題としているのですが、今日的には機械化での大規模農業も出てきています。ただし、地産地消的農業の可能性の問題も考える必要。

・「ボリシェビキの一〇月クーデターを成功させた大前提は、民族革命と農民革命であって、じっさいにクーデターを指導したのは、ペトログラード・ソヴィエト議長トロツキーにはかならない。」 258P・・・農民運動と民族運動の位置と意味を押さえ直す必要。クーデター？

・「レーニン主義とはマルクス主義の国家暴力主義バージョンであり、マルクス国家死滅論の否定である。」 260P

・「民族的具體性——言語・歴史・宗教・文化の村長にもとづいてレーニンの提言、「抑圧民族・大民族の民族主義と被抑圧民族・小民族の民族主義を区別」し、民族完全独立・解放闘争を世界革命の最も活発で勇敢な舞台と認め心から連帯せよ。これが結論である。」 267-8P・・・民族闘争の過大評価。今日的に、グローバリゼーションの進行の中で、国家

間の格差による収奪の構造がとらえられ、国民国家的な「独立」では解決できない問題が出て来ています。このあたりは、独自の言語から民族問題に比するとして突き出しているろう運動サイドからも、「ろうの国」運動創りとして展開していない問題からも問い返していくことが必要になっています。

・「農業の強制集団化、ムスリム諸民族・ウクライナ民族の抑圧は、四大粛正裁判を頂点とした大粛正と相いまってソ連の反革命の変質の象徴であった。この歴史過程とともに、ドイツ革命の敗北、フランス人民戦線の挫折、スペインの内戦への反革命的介入は、ヒトラーの第二次大戦による侵略戦争の前提をなす。ここで次に独ソ不可侵条約の締結と、それによるポーランド分割こそが、第二次大戦後のスターリンの東独支配＝民族抑圧の発端であることを明らかにしていきたい。」275P・・・東欧の「衛星国」化、収奪の構造の章へのリード文です。

・著者のチトー批判——チトーは民族問題で蓋をただけ 307P

註

わたしの廣松さんとの対話は、わたしの『情況』への投稿文の中でも展開しています。わたしのホームページに期間限定(8月末まで)で掲載しています。

<http://www.taica.info/hiromatubusho.pdf>

たわしの読書メモ・・・ブログ 562

・天笠啓祐『新型コロナワクチン—その実像と問題点』緑風出版 2021

この本は、「たわしの映像鑑賞メモ 052・UPLAN 天笠啓祐「一線を越えた生命操作～新型コロナワクチン・ゲノム編集食品・RNA 農薬～」DNA 問題研究会シンポジウム 2021.6.13」でとりあげた講演会で紹介されていた本です。急遽、読書計画に挟み込みました。なお講演会のタイトル「一線を越えた生命操作」がこの本の、「終章 一線を越えた時代——生命操作とワクチン」とリンクしています。

著者はバイオテクノロジー関係でその危うさの警鐘を鳴らし続けているひとです。「図書新聞」に今年の上半期のお勧めの本として各界の論者が3冊くらい推薦本を上げているのですが、天笠さんも各界の論者に入っています。その肩書きは「ジャーナリスト」になっています。わたしは市井の学者というようにとらえていたのですが、科学批判を展開しているひとなので、「学者」ということでくくられることに拒否感があるのかも知れないと勝手に推測したりしていました。専門的知識は基礎から学んでいかなないとなかなか理解しにくいのですが、それでも、天笠さんはかなり分かりやすく解説してくれているひとで、大雑把にそれなりに吸収させてもらいます。この本を探していて、もう1冊コロナワクチン関係の本を見つけ買っていますので、それを読んでメモを残してから、天笠さんの積ん読している本を何冊か読みます。

今、日本政府はワクチンをコロナウイルスを押さえ込むための最も有効な方法として、時には菅首相が「唯一の方法」とまで言いながら(註1)、ワクチン接種を進め、ワクチンの危険性を指摘することに対して、「デマ」のレッテルを貼ろうとしています。今、マスク

ミは御用マスコミとリベラルに二分化される傾向があるのですが、リベラルととらえられているマスコミも「デマ狩り」に一緒になって動いています。これについて、いくつか批判の文を書いてきたのですが、今号巻頭言で政府関連のホームページに書かれていることに対話を試みています。わたしは報道番組で、すなわち映像からコロナウイルスやその感染症対策の情報を吸収してきたのですが、そこから延長して本も押さえて置きたいと、この本と次の本を読みました。

この本とこれまでの知識との対話の中で結論的なことを書いておくと、今回のワクチンは、特に日本で接種しているワクチンは、遺伝子操作ワクチン（註2）と言えることで、しかも特例承認とか、緊急承認ということで、十分な検証がなされていないワクチンということです。とりわけ、晩発性の副反応とか、発がん検証とかがなされていません。そして、そもそも遺伝子操作という技術を使うことによって何が起きるか、そのことの議論がまず必要です。この本の中でワクチンの歴史も書かれています。ワクチンという予防手段が、その予防する感染症よりも、恐ろしいとかもあってたりして、そもそも、接種する意味があるのかという議論ときちんと対話していく必要を感じます。特に、今回の遺伝子操作ワクチンは、遺伝子操作が何をもたらすかを考えた時、そのことの検証なしに、この技術は使ってはならないとまでも思うのです。

この本は地球環境や社会・政策的なことやワクチンの歴史も含めて総体的に論じているわかりやすい本です。是非読んで欲しいと思います。

前述したように、この本は資料集めの意味ももって読んだ本、わたしが留意したところを切り抜いてメモにしておきます。

「……しかも、今回使用されているワクチンは、「人間の細胞内で遺伝子を操作する」これまで経験がない働きをするものであり、大規模な人体実験に当たるものだった。」

10P

「最初に述べたいことは、新型感染症発生の根本的原因と、根本的対策とは何か、という視点である。これを怠れば、再度、再再度、繰り返し新型ウイルスがやってきて、日常生活は苦しめられることになる。その根本的原因として考えなければいけないのが、地球環境問題と社会的・政治的背景である。地球環境問題では、気候変動と生物多様性の破壊が大きく関係している。／社会・政治的背景としては、これまで進められてきた経済優先政策が、感染症拡大を抑えるための基本である公衆衛生を切り捨ててきたことに加えて、感染拡大対策として罰則強化と管理社会化、ワクチンに依存するという、本末転倒なことが進められてきた。これは矛盾の拡大をもたらすことになりかねない。」 12P

「遺伝子組み換え作物が新種の微生物を作りだした一例を米国パーデュー大学名誉教授ドン・M・ヒューバーが指摘し、警告を発したことがある。少し詳しく述べよう。……植物では、収穫を減らす原因になっている二種類の病気（大豆の突然死症候群とトウモロコシの立ち枯れ病）にかかった植物から、この微生物が多量に検出されている。／動物では、自然流産や不妊になった多種の家畜の体内にこの微生物が存在することが確認されており、臨床実験でも流産を引き起こすことが確認されている。」 16-7P

「ベルリンにあるシャリテ医科大学ウイルス研究所のサンドラ・ユングレンもまた、「生態系のバランスが崩れれば感染症が広がり易くなる。生物多様性が機能してさえいれば、感

染症拡大のリスクを減らすことができる」と述べている（ドイツ環境省二〇二〇年四月二日）。」 36P

「・・・・・・・・・・医療が人々を救うものから、経済効果をもたらすものへと変更されてきたのである。」 46P

「それら従来の方法に代わり、バイオテクノロジーを応用した開発が主流になってきた。これはHPV（子宮頸がん）ワクチンが先鞭をつけたもので、「遺伝子組み換えウイルス様粒子（VLP）ワクチン」と呼ばれるものである。蛾の細胞を用いた遺伝子組み換え技術で開発したものである・・・・・・・・・・しかし、この技術でのワクチン開発も短縮されたとはいえ、最低四～五年を必要とすることから、さらに時間を短縮できるDNAやmRNA、あるいはウイルスベクターを用いた、新型遺伝子ワクチンへと、開発の方法が大きく変化している。この新型遺伝子ワクチンは、開発機関が短縮されるだけでなく、量産が容易である。今回のように急いで大量に必要な際には、最適である。／しかし、これまで接種の経験がないワクチンであることから、有効性や安全性が大きな問題になってくる。」

61-2P・・・・・・・・この後に「人体実験である」という見出しの論攷が展開されています。

「従来のワクチンである生ワクチン、不活性化ワクチン、VLPワクチンは、いずれもウイルスそのものやウイルスの一部のたんぱく質、すなわち抗原そのものを作って人間に接種してきた。／それに対して、この新型ワクチンは、人間の体内に遺伝物質を導入し、ウイルスのたんぱく質の一部（抗原）を人間の細胞内で作るようにするものである。すなわちワクチンの働きをする物質は、人間が体内で作り出すことになる。これは遺伝子治療の考え方であり、人間の遺伝子操作である。」 65P

新型コロナウイルスワクチンの問題点 9点 66-8P

ワクチンの種類、I.従来型のワクチン（ウイルスそのものを接種）①生ワクチン②不活性化ワクチン、II.遺伝子組み換え技術で作るワクチン（遺伝子組み換え技術でウイルスのたんぱく質を作る）③遺伝子組み換えウイルス様粒子（VLP）ワクチン④遺伝子組み換えたんぱくワクチン、III.遺伝子を体内に入れ、体内で抗原を作らせるワクチン⑤DNAワクチン⑥mRNAワクチン⑦ウイルスベクター・ワクチン 68-70P

「また、接種開始とともに懸念されるのが、医療関係者、高齢者やその施設の関係者、基礎疾患を持つ人などに対して、接種が強制されることへの懸念である。また、深刻な副反応が起きた場合、国が救済するといっているが、それは「補償がない」ことを意味するのではないかという懸念である。これまでも国は、さまざまな局面で因果関係が立証されていないとして救済を拒んできたからである。」 118P・・・・・・・・「因果論」は、函数的連関で言えば、変数をひとつとしかとらない非論理的知でしかありません。

「もし、日本でワクチン接種が進めば、感染症による死亡率は決して高くない現状から見ると、ワクチンによる副反応の方が、感染症自体より悪い影響をもたらす可能性すらある。」

126P

「この一九九四年の変更は、主に国の責任回避を目的にしたものである。それまでのワクチンは、ほとんどが生ワクチンで、副反応が一定の割合で起きた。当時、その副反応は「悪魔の選択」と表現された。必ず誰かが、被害を被ったのである。それは運が悪いということではすまされないのである。国が接種を義務づければ、それに対して国が補償しなければ

ばならない。その国の責任を回避するのが主目的で、接種が義務から勧奨に変更されたのである。国が接種を義務としないということは、接種の対象は大半が子どもたちであることから、最終判断は親に委ねるということにしたのである。／こうして親が子どもに接種を受けさせないと、非難されるようになり、受けて被害が生じても、親の責任にされるようになったのである。」142P・・・「国が補償しなければならない」というのは原理で、必ずしも補償してきたわけではないのです118P。小松美彦さんの本「自己決定という罫」とのリンク。

「従来、自然界になかった改造作物をつくり広範囲に環境中に放出すれば、生態系に異変を引き起こす危険性が強まることは必至である。また、これまで食べた経験のない新しい生物であることから、食品の安全性を脅かすことになる。／自然は保守的であり、多様であり、連鎖的であり、総合的である。人間の手による生命の勝手な改造は、予想もつかないリアクションを引き起こすことになる。生命原理を経済効率に併せて改造していけば、環境や人間への安全性はおろそかになる。」172P

「一線を越えた生命操作の時代がやってきたといえる。AI、5G、そしてビッグデータに生命操作が重なり、ブルドーザーのように社会を変え、人間を変え、生命を変えようとしている。その中に新型コロナワクチンがあることを理解しておくことが大事である。」178P

註

1 「唯一」としているのは、自粛要請が、まさに失政の中で効かなくなっていることと、検査を増やして陽性者を見出して行動規制を要請していくという方法を、ちゃんとやらないということから来ているのです。

2 ファイザーとモデルナのワクチンはmRNAを使ったワクチン。アストラゼネカはウイルスベクターワクチン。いずれも遺伝子操作ワクチンと筆者は押さえています。70-2P

たわしの読書メモ・・ブログ 563

・内海聡『医師が教える新型コロナワクチンの正体 本当は怖くない新型コロナウィルスと本当に怖い新型コロナワクチン』ユサブル 2021

この本は、前の読書メモに書いた天笠さんの本を買いに行った本屋の店頭で、一緒に並べて置いていた本です。タイトルからして疑問を感じたのですが、一応読んでおこうと買い求めました。本の中でQファノンの陰謀論を批判しています。そんな陰謀論を展開しているひとがいるから、まっとうな指摘が陰謀論として排除されるのだという指摘です。ですが、著者も陰謀論的などころに陥っています、Qファノン陰謀論が批判されるのは、論理的におかしいからです。Qファノン陰謀論はそもそも偏見を煽るだけで論理性などないに等しいのですが。この本も、情報として得るところもあるのですが、論理的にきちんと展開されているとは言い難いことがあって、こんな本は、逆に、今広がっている「ワクチン批判はデマだ」という論拠にされるのではと、感じてしまいました。

情報として得るところと論理的におかしいことを指摘しておきます。

情報として得るところの大きかったところは、ワクチンの危険性とか、自然免疫力の考え方が、いろいろ指摘してくれていることです。このコロナウイルス自体を過小評価しているとはいえ、この本のタイトルの「**本当は怖くない新型コロナウィルスと本当に怖い新型コロナワクチン**」ということは、きちんと押さえて置く必要があると思っています。

論理的におかしいことは、第一に、ワクチンの副反応と感染症被害とのとらえ方がダブルスタンダードになっていること。すなわち、ワクチン被害は大きくとらえ（逆にいうとワクチン効果は少なくなるとらえ）、感染症被害は小さく見せようとしていること。また、第二に、PCR検査を批判している内容は、これまでのPCR検査をめぐる議論との対話がきちんとなされているとは思えないこと。そして、第三に、第二のこととも内容的には同じですが、マスクに関する議論は、いろんなシュミレーション実験をしながら、議論がなされてきたのですが、その議論との対話がなされないで、初期の議論のまま、マスク効果を論じていることです。

もう少し詳しく押さえて見ます。

第一のこと。そもそもこのコロナウイルスのおそろしさがなんであるのかを押さえているとは思えないことです。このひとは無症状者も感染源になることを否定しているようです。もし、そうならば、発症したひとだけを「隔離」するということで押さえられたことです。なぜ、感染がこれだけ広がり、問題になっているのは、無症状者も感染させることがあるということで、そのことはそれなりに立証されていることだとわたしは押さえているのですが、著者はそのことから覆そうとしているようなのですが、相手側の論理をきちんと書いてそれを批判していくという手法ではないので、この本を読んでも、「覆している」ようにはとてもとらえられません。そもそも、著者の書いていることが陰謀論的になっているというのは、政府とマスコミが、このコロナウイルスの危険性を煽ってきた、というとらえ方から来ています。そのこと自体が、間違えています。一部憲法改正のための緊急事態条項を創るためのきっかけにしようとしたとか、国民管理のためのIT導入の動きとリンクさせようという動きはありますが、政府の主たる動きは、経済優先と国威の発揚としてのオリンピック開催のために、このコロナウイルス感染症を小さくとらえようとしてきたのです。

この著者の立場は、何も対策をしないというスウェーデン型の無対策になると思うのです。初期のイギリスも同じ対策をとろうとして感染の拡大をもたらし、首相自身が感染して、転換しました。ワクチン接種をして、もう一度最初に戻ろうとしているようですが、どうも危険な実験としかとらえられません。スウェーデンでもかなりの死者が出ています。これは医療の否定のようなこと、過剰な医療批判はかねてからあり、そのことは一部わたしにもあります。その典型がワクチン問題とも言える事です。ただし、医療そのものの否定となると、現実「病気」に苦しんでいるひと、「病気」で命をおとすひとを放置するのとなると、医療を全否定はできなくなります。この本のタイトルは「**医師が教える……**」となっています。そもそも医者「特権的」にしていく「医師」などという言葉さえ使って、医者の立場を突き出しているのですから、医療を否定しているわけではなく、何をかいいわんという思いを抱きます。

それから、経済の問題から失業率が上がるとそのことによって死者が増える、コロナに

よる死者とどちらが多いのかという経済効率のような話をしていますが、そもそも感染症対策をしない、そして間違えることによって、経済が回らなくなるという今起きている事態をどうとらえるのでしょうか？ そもそも、因果論的なことに陥っているのです。失業率が下がると自死者がでるとするのは、そもそも補償とか、ベーシックインカムとかないところでの議論で、今回の日本のコロナによる危機的状況は、経済効率とかいうような話で医療保障を脆弱にしてきた中での危機ということ、そもそも今の社会体制の矛盾がこのコロナで一挙に噴出しているという問題なのです。今の社会のあり方から、根本的にとらえかえていく必要があるのだと思います。

第二に、PCR検査の問題。そもそもこの検査法は十全な検査法としてとりあげられている訳ではありません。感染症対策は、何もしないという無策にしないがきり、検査をしないと何も始まらないから、もっともベターな方法として使われているだけです。著者は擬陽性の問題を主に取り上げています。「死んだウイルス」とかいう表現があるのですが、ウイルスは生物と無生物の中間的存在で、無生物という性格からしたら、「死んだ」という表現はおかしいのです。著者も使っている「不活性化」という表現の方が妥当ですが、そもそも、そもそもウイルスの性格からして「不活性」ということかを見極めるのがむずかしく、幅広く感染の定義をとるしかなく、行動制限も広くとることになります。感染症対策が幅広く取るという基本からすることで、その被害ということは、感染症対策からしてやむを得ない処置ということで、周知徹底させ承認をとっていくしかないことです。確かに、ハンセン病のように感染の可能性が低いと分かっている、何十年も隔離していたことの問題がありますが、どう長くとっても1ヶ月未満のことで、しかも、経験値で縮められてきています。これは保障をきちんとすれば、解決できることです。今、大体の議論的な収束点として14日ルールのようなことが創られています。むしろ問題は、偽陰性の問題です。これが、30~40%でるということで、これが批判の対象になっていて、経済効率性の問題として「むやみにやっても仕方がない」とかいう話になっていました。しかし、感染者を見つけ出す方法として、一定の有効性があったことで、政府がなぜ検査を抑制したのか、まさに大きな失政の一つだとわたしは思っています。著者は「御用学者」とか言う言葉を使っていますが、御用学者とか付度専門家とか言われているひとたちは、むしろ検査を進めようとする政府の意向で方針を作り、政府がそれを維持していくことを支えていました。口だけで「検査の拡大」を唱えていましたが、ちゃんと実行しなかったのです。

さて、第三のマスク、これも初期のマスクがなくなる中で、御用学者が、「マスクは効果がない」という話をしていました。ですが、著者も取り上げている、欧米で感染が拡がりアジアでは拡がりも少ない（今、これはデルタ株出現で崩れてきていますが）「ファクターX」として「マスク文化」が指摘されていました。とにかくシュミレーション実験とかで、この感染症は飛沫感染やエアゾル感染の要素が大きいとかいう話が出て来て、マスクは被感染には効果が薄いけど（それなりに効果はある）、感染させることでは予防効果はそれなりにあるとされています。そのあたりの議論の進展を著者は押さえているようには思えません。

この本を読んで疑問点を21個くらいメモしていました。だいたい前述の三点の指摘で中に織り込みました。

巧く織り込めなかったこと二点だけ。一つは、「副反応」という言い方が広がっていることに対して、著者は、ごまかしがそこにあるとしているのですが、わたしはむしろ、「副作用」というと、これまでの押さえ方として薬自体の害として押さえがちなものに対して、幅広く押さえようとして出てきた概念ではないかと推測しています。すなわち、ワクチン接種での注射に対する恐怖から心臓マヒを起こしたとか、いうと副作用ということよりも副反応として害をとらえられるからです。

もう一つは、著者はきちんとした分析をして、他の意見との対話の中で、自らの論を深めていくことが、できていないことの一つとして、どうもまだ中国＝共産主義の国としてとらえ、中国の全体主義的動向を批判しています。今、自民党の論客の議員さえ、そのようなところから脱しているときに、です。わたし自身も「他山の石」として、自らの「きちんとした分析をして、他の意見との対話の中で、自らの論を深めていく」という姿勢をきちんと貫いていきたいという思いをもって、この著者・著書との対話をさせてもらいました。

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 053

・NKKEテレ ハートネットTV「生きたいと言える社会へ（2）京都ALS嘱託殺人事件から一年 “あなた” に会う旅」2021年7月7日 20:00～20:30

このドキュメントに出てくる岡部宏生さんは、ALS関係の番組によく出て来ていて、京都ALS嘱託殺人事件のNHKの番組にも出ていました。ただ、その中の発言が、「わたしも迷っていた」くらいしかなく、それでは「生きよう」ということにつながらないのではと感じていたのですが、岡部さんは、日本のALS患者のひとたちの7割が付けないまま死んでいく状況で、自身も人口呼吸器をつけることを迷っているなかで、日本のALSのパイオニア的橋本操さんとの出会いの中で、呼吸器をつけることを選び、今度は自分が日本一歩歩くALS患者として、他の患者と会いに出かけ、そして看護のひとたちへの働きかけもしています。その中、言葉を失ったひとが、周囲が必死に支えているという感じではなく、家族ヘルパーさんが明るい、本人が「ふわっとした感じ」と岡部さんがいう存在、このドキュメントの最初に出てくる「ひとは生きているだけで価値がある」ということが、つかめる感じなのです。他のひとたちも、いろいろ迷いながらも、ひとの生きるとは何かをつかんでいく、まさに哲学的な問いを突きつめるような生がそこにあると感ずるのです。

「価値がある」ということ、「価値」云々を超えて、「ただ生きているだけ」がベースである社会こそが、もっともひとの生きやすい社会なのだと思います。

たわしの映像鑑賞メモ 054

・中村桂子（JT生命誌研究館名誉館長）「**新型コロナウイルス**」（67）**コロナ後の社会**
「**新型コロナ・脱炭素（？）・SDGs** ～戦いではなく新しい生き方（世界観）～」日本記者クラブ講演・会見 **2021.6.17**

偶然テンターネットで観れました。

中村さんは生物誌の学者です。生物学の立場からいろいろ興味深い話をしていました。わたしにとって特に印象深かった話を書いておきます。

まずウイルスや細菌はそもそもヒトより前に地球上いて、ヒトの体の中にも無数いて、ひとが「私」というとき、ウイルスも細菌も含んだ体内自然としての「私」であること。

中村さんの流れの日本の生命論的世界観とアメリカ的な機械論的世界観との対峙。

「私たちのなかの私」という考え方。

進化論的扇図——高等・下等生物という考え方の否定とその図を上から見るようなことのおかしさ。ひとはその中に含まれている。・・・これは俯瞰図的になっているので、後から考えると、表現的にはちょっとおかしいと思うのですが。

進化論の進化や発生を「展開」「絵巻を開く」としてとらえる——機械論的世界観ではこれは、進歩や開発という概念。

生物は予測不能性・プリコラージュ（つきはぎ）・偶有性——工学は予測可能・論理・統計確率

私たち——生き物たち、というつながり

ウイルスは動く遺伝子、遺伝子は壊れやすいので蛋白質で覆われている

遺伝子に固有性はない、その組み合わせが固有性をもつ

生命の始まりは、単細胞で、それは分裂の繰り返しで死という概念はない、雄と雌ができて生殖するところから、唯一無二の固有性の概念が出来て、死という概念が出てきた（ただし、雌の方には細胞分裂での継続性がある）。機械的世界観では、不老不死を目指すことになる。

「脱炭素」ということには、ひとは炭水化物でできているので、違和を感じる

一極集中型から分散型ということが生物学的にかなっている

ウイルスや細菌ということを含めた「わたし」というところから体内生態学というようなことも考えられるのではないかと考えていました。それと一般的な生態学の、からだというところでの内——外の対照的なようなことも。

生物学的なところのとらえ返しから、ひとの社会の在り方を考えていく面白さのようなことを感じた講演でした。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 110 号」アップ(21/8/18)
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

インターネットへの投稿から

2021.7.22 オリンピック鑑賞への忌避感情

オリンピックの競技が一部始まりました。これまでのこれでもかと続く不祥事が走馬灯のように思い出されます。そして、数々の差別発言、アンダーコントロールという大嘘から始まり、「命と生活が一番」「安心安全の大会」が大嘘として露呈してきています。まるで大会に合わせたようなコロナウイルスの拡大の中で、どうしてオリンピックが開催できるのか分かりません。

アメリカの放映権をもつテレビ会社のひとが、「オリンピックが始まると、みんな観る」と言ったそうですが、わたしはスポーツ観るのが好きだったので、もう、ニュースのスポーツコーナーでも、スイッチを切ったり、チャンネルを変えたりしています。東京オリンピックが終わっても、コロナが収束しても、元に戻るのでしょうか？

聖火リレーでスポンサー企業の赤い大きな車が併走していました。オリンピックの商業主義の象徴です。わたしは、もうその会社の飲み物を飲まなくなりました。これも、もう元に戻らないでしょうー

2021.7.24 #差別のまみれのオリンピック中止！

差別発言で辞めた森前会長が、組織委員会と一緒にオリンピックを観ています。信じられないことです。そもそも組織委員会がそんな組織だから、性差別、障害差別、民族差別と、差別的なことが次から次に起きています。差別主義が組織委員会そのものの体質としか言わざるを得ません。

小池都知事が「人権に配慮」発言をしていました。わたしは人権論者ではありませんが、人権は「配慮」することではなくて、「厳守」することです。「人権を遵守する」ことはスポーツをやる前提です。それがないと、戦争の論理になります。

国威の発揚という国家主義、「復興五輪」とか「コロナに打ち勝った証しとしての五輪」

とかいう政治利用主義、企業の利益とスポーツ関係団体の利益を求める商業主義、いのちが大切ということを軽視する発言が出てくる「アスリートファースト」という自己中心主義。そして差別まみれの五輪。五輪自体、スポーツ自体の意義を考え直すときです。

「IOC貴族」とか言う言葉が出て来ていますが、一部のアスリートにも「感動を与える」という上から目線の「アスリート貴族」意識というようなことがあり、それが「IOC貴族」を支えているのではないのでしょうか？

2021.7.27 TBSBS「報道1930」への投稿 「ワクチンデマ」について

いつも番組観させてもらっています。このコロナウイルスの問題が起きてから、できるだけ欠かさず観させてもらっていて、とても勉強になってきました。ですが、今回は疑問に感じることもありメールさせてもらっています。

以前も一回ワクチンへのデマということをやっていて疑問を感じていたのですが、7月26日の放送でまた取り上げていました。局で作ったパネルに4つのデマということが書かれていました。

- ・不妊になる 流産する
- ・遺伝子情報が書き換えられる
- ・マイクロチップが埋め込まれている
- ・有色人種が実験台にされている

これは、どこで誰が流したことなのか、きちんと検証しないとデマかどうか確認しようがないのですが、三つ目は、明らかにデマだと思いますが、その他は、デマという主張がデマになる可能性さえあります。

まず最初、確かに「・不妊になる 流産する」というデータは出ていないとされています。ですが、例えば、流産について、まだワクチン接種して一年も経っていないし、治療でそんな人体実験のようなことはしていないと思えるので、ワクチン接種が始まって、たまたま妊娠していたひとや妊娠していてもワクチンを打ちたいということで打ったひとでの、モニタリングデータなので、そんなにデータが出てくる筈がないのです。不妊は一年で分かるはずがないとも言えます。動物実験による早発性の負のデータでない限り。

このような意見が出てくるのは、遺伝子操作作物や遺伝子操作家畜で、流産や変異や不妊が起きてきているというデータがあるからです。

最近読んだ本の読書メモから引用します。天笠さんは遺伝子操作作物や動物の危険性について、そして「生物多様性と食・農」ということから広くエコロジー的論点を展開してきた「ジャーナリスト」です。

たわしの読書メモ・・・ブログ 562・天笠啓祐『新型コロナワクチン—その実像と問題点』緑風出版 2021（これは8月にわたしの「通信」に掲載予定の未公表のメモです）

「遺伝子組み換え作物が新種の微生物を作りだした一例を米国パーデュー大学名誉教授ドン・M・ヒューバーが指摘し、警告を発したことがある。少し詳しく述べよう。・・・・・・植物では、収穫を減らす原因になっている二種類の病気（大豆の突然死症候群とトウモロ

コシの立ち枯れ病)にかかった植物から、この微生物が多量に検出されている。／動物では、自然流産や不妊になった多種の家畜の体内にこの微生物が存在することが確認されており、臨床実験でも流産を引き起こすことが確認されている。」16-7P

二つ目のデマとされる「・遺伝子情報が書き換えられる」ということ。

これは、上記の同じ本から「従来のワクチンである生ワクチン、不活性化ワクチン、VLPワクチンは、いずれもウイルスそのものやウイルスの一部のたんぱく質、すなわち抗原そのものを作って人間に接種してきた。／それに対して、この新型ワクチンは、人間の体内に遺伝物質を導入し、ウイルスのたんぱく質の一部(抗原)を人間の細胞内で作るようにするものである。すなわちワクチンの働きをする物質は、人間が体内で作りに出すことになる。これは遺伝子治療の考え方であり、人間の遺伝子操作である。」65P これもデマとするならば、きちんと批判されることです。

4つ目、「・有色人種が実験台にされている」は、こんな主張がされるのはエイズの治療薬を作るときに、アフリカや東南アジアのひとたちで治験が進められたという話にリンクしていきます。多分このワクチンは、欧米のひとたちで急激に広がっている感染症として治験もされているので、デマになる可能性は強いのですが、それでも治験に応じるひとが、貧困であるひとの可能性が強く、貧困層の人種的偏りということはあるかもしれません。ただ、治験がワクチン効果の人種的差異も検証することでなされたとすれば、こんな主張は成り立ちません。これに関しては、きちんと検証する必要があります。それに中国やロシアのワクチンに関しては、ワクチン外交と称して他国にワクチンを提供してモニタリングしているので、「有色人種」云々は必ずしも当てはまりませんが、「実験台」という主張は一定当てはまります。何れのワクチンも緊急承認し、モニタリングしながら進めているという意味では、そもそも巨大な人体実験という主張はあてはまります。

そもそも今、マスコミは政府同調御用マスコミとリベラルマスコミに二分してきています。なぜ、リベラルのしかも、「報道特集」と双壁のリベラルさのこの番組で、「みんなでワクチン接種しましょう」みたいなところから「デマ狩り」とでも言えるようなことをされているのか分からないのです。ワクチンの副反応は、早発性だけでなく、晩発性の副反応もあります。この治験では、「遺伝子毒性試験や後になって出てくる発がん性試験も経ないで作られたワクチン」(天笠さんの講演の中での発言)なのです。子宮頸がんワクチンは、その副反応被害で政府も推奨をとりやめているはずですが、そして、そもそも、ウイルスワクチン自体への疑問は多くのひとが語ってきたことです。その副反応として、ウイルスの変異自体を呼び込むことだと。

このワクチン自体が副反応が出て来て接種中止になっていく可能性もありますし、被害で訴訟問題にまで起きてくる可能性もないとは言えません。

番組の中で自民党の武見さんでさえ、多角的な選択可能な対策をと語っていました。

そもそも、当番組はPCR検査拡大による感染者の発見・行動制限という方法を主張してきたのではなかったのでしょうか？ 今起きてきているワクチン接種の義務化の動きというのはワクチンファシズムとも言いえるようなことではないのでしょうか？ そのことの批判こそが必要になっているのではないのでしょうか？

2021.8.2 「デマ」狩り投稿への批判

フクシマ原発震災でも、「風評被害」狩り、「デマ」狩りのようなことがおきたのですが、政府・マスコミを中心にして、このワクチン接種でも「デマ狩り」のようなことが起きています。ちゃんと冷静に情報収集しましょうー

厚生労働省のホームページ[新型コロナウイルスワクチンの副反応疑い報告について | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp)、更新されていますが、7月21日くらいのページに、「接種後死者 751 人」のデータがでてます。これ自体かなり非論理的な文で、結論部分に検証が必要なので、後で批判するつもりですが、とりあえず参照ください。以下引用

死亡例の報告について（資料 [1-3-1](#)、[1-3-2](#)、[1-5-1](#)）

- 対象期間（7月11日まで）に、ファイザー社ワクチンについて663例、武田/モデルナ社ワクチンについて4例の報告がありました。その7月16日までには、さらに両ワクチンを合わせて84件の報告がありました。
- 現時点では、ワクチンとの因果関係があると結論づけることのできた事例は認められず、ワクチン接種と疾患による死亡との因果関係が現時点で統計的に認められた疾患はありませんが、引き続き、個々の事例について専門家による評価を行うとともに、接種対象者の属性に留意しつつ、集積する事例に関する情報を収集し、評価を行っていくこととされました。
- 死亡例の報告に関しては、現時点において引き続きワクチンの接種体制に影響を与える重大な懸念は認められないとされました。

ワクチン接種者を増やして介助態勢をきちんと立て直そうと意図ゆえの投稿と思いますが、テレビでも接種後の死者の報告はされていますし、発熱や倦怠感や筋肉痛、モデルナでの発疹の副反応の報道はされています。事実関係をしっかり把握して、きちんとした情報の収集と、整理をしていき、きちんとした議論と確認の下で、きちんとした関係の構築を図っていく必要があるのだと思います。

厚生労働省は、今回は、「副作用」という言葉を使っていません。「副反応」です。例えば、注射に対する恐怖感で、ショック死した場合の死者も含まれる概念ですね。ただ、厚生労働省は、因果関係は「評価中」としています（因果論自体が非科学的なのだとわたしは批判しています）。緊急使用ということで、これだけの接種後の死者が出ています。コロナウイルス死者の2%です。「評価中」でそのまま接種続けていいのでしょうか？ それに、副反応は、年代によっては、半分近くのひとに出ています。しかも、副反応は、中長期の副反応を考えると、氷山の一角という可能性も考えられます。しかも、これは遺伝子操作ワクチンです。遺伝子工学をやっていたひとが、「遺伝子操作は原子炉溶融より恐ろしい」と書いていることがあります。副反応には、ワクチンが変異種を生み出すことになるという

ことも含まれるのです。

「多幸感」は負の情報が遮断されているからではないでしょうか？ わたしが問題にしているのは、政府・マスコミがきちんと情報を整理して、情報を公開していないことです。厚生労働省のホームページにアクセスして分析するひとはそんなにいません。政府やマスコミの表面的な言及で動かされていきます。今、政府はオリンピックの継続ということで、過度の楽観論を突き出しています。一方で、感染症対策で、危機感を煽るという意味不明のダブルスタンダードになっています。今、死者数はかなり少なくなっています。心配なのは医療崩壊です。もし、医療崩壊を回避できたなら（わたしは危機対策は最悪を想定するというので楽観論はとれませんが、楽観論的な仮定として）、コロナウイルスの死者とワクチン接種後の死者がそんなに変わらないという状況になるのではと思います。それに、ワクチンによる変異種増大も考えると、また、そのことを含めた後発性の副作用も考えると、そんなワクチン意味があるのでしょうか？ 遺伝子操作植物や動物の**不稔・不妊**の指摘も出ています（人道的に、ヒトでの検証は偶発的なモニタリングとしてしかできません）。高齢者には不妊の問題はあまり関係ないとしても、不妊の被害を被る若い世代は、そもそもひと総体の種の存続の危機の問題として、まだ重症化率は低いとされているなかで、ワクチン接種するかどうか、きちんと、情報を整理し、公開していく必要があると思います。

わたしが問題にしているのは、厚生労働省は「評価中」だとしていることです。いつ評価を下すのでしょうか？ ワクチンを打ち終わった後に？

わたしが言っているのは、きちんと情報公開し、議論をし、質問に答える態勢を作って、進めていくことです。データだけだして、きちんと分析もちゃんとしようとしていません。「緊急使用」ということで—

iPS細胞でALSのひとたちの治療という「希望」の話なのでしょうが、ひとの命を救うということで、遺伝子操作が「市民権を勝ち取る」という事態が出てきているのですね。天笠啓祐『新型コロナワクチン—その実像と問題点』緑風出版 2021 という本を最近読みました。今回のコロナウイルスでいまのところヒトの種の絶滅という事態は考えられませんが（ワクチンと変異のいたちごっこの行き着く先は分かりませんが）、遺伝子操作技術の行き着く先に、ヒトという種の絶滅という事態をわたしは想起してしまいます。原子力エネルギーの核燃サイクルということでの「**夢**」は破綻しています。わたしは、原子力、臓器移植、遺伝子操作という三つの技術は封印すべきだと思っています。

(編集後記)

◆今回も「普通に」読める分量です。しばらく、このくらいの分量でまとめます。

◆今回の巻頭言は、最初に前号の編集後記で書いた事を、転載しさらに問題を掘り下げようとの試みです。前号ではフェイスブックの貼りつけ文への批判を書いたのですが、今回は厚生労働省にまで、遡及しました。引用をできるだけ元の形態で転載しましたので、却って読みづらくなってしまいました。なんとか読んでもらえるでしょうか？

厚生労働省のホームページは日々更新されているのですが、8月4日時点で「接種後の死者」は828人（ファイザー社分）になっています。内βは前と同じで3人で、後はγです。確かγには、出された当時は「評価中」という文字だったと記憶していたのですが、「評価不能」と改竄されています。評価自体を放棄したようです。「評価中」死者が出ていて、「評価中」となると、「評価」の結論がでるまで、一端ワクチン接種を中止するとなるということで、「評価不能」としたのでしょうか？ わたしは、これは歴史上最大の薬害になる可能性まで考えてしまうのですが、杞憂になるように願っています。

◆「読書メモ」は、一連の古典学習の補迫の民族問題と、急遽挟んだコロナワクチンの本2冊です。今回はそこから波及して天竺さんの本を4冊読み、すでに読書メモを書いたものを掲載します。

◆映像鑑賞メモは、「ALS嘱託殺人事件」関係で「ALS」関係の番組をNHKで作っているのですが、いつも違和一杯で観ているのですが、今回は、それなりに共鳴して観れました。

◆「インターネットへの投稿から」は、オリンピック関係でのSNSへの投稿、TBSBS「報道1930」への投稿です。「報道1930」はずっとPCR検査のことを追いかけていて、それをわたしが追いかけて、いろいろ情報を得ることが多かったのですが、今回は疑問を持ちました。リベラルな番組なのですが、ときどき、「えっ」と思うことがあります。外交に関する事、国家主義批判が貫徹されず、「日本」の論理にとらわれることも出てきます。そもそも日本の政治家で、そのようなことを押さえているひと、僅かしかいないのですが。

三つ目の投稿は、他者の投稿に「コメント」欄で投稿したものです。結局、二人のひとと応答しました。「他者の文」を掲載しないと、何のことか分からないのですが、確認がとれはしないことです。このやりとりの中でヒントを得て巻頭言の文に書き加えをしました。断片的な文になってしまうのですが、こちらの方が簡潔で読みやすいかもしれません。参照ください。

◆次回の巻頭言は「オリンピック、廃止か改革か」（仮題）の予定です。次々回は「三つの封印すべき技術——原子力、臓器移植、遺伝子操作」（仮題）の予定です。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をな

そうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>